

希
望

夕輝
文敏

十一月の冷たい雨が、歩道に散った落ち葉を濡らしていた。人通りの絶えた日曜日の夜、雨音だけが、シャツタ―を閉めた商店街を駆け抜けて行く。眠りにつこうとしている通りの中、一軒の寿司屋には、まだ明りがついていた。だが、暖簾は外されていた。

丸万寿しの大將、山越信明は、最後にもう一度と、長年使い込まれたカウンターを拭いていた。「あんた、今夜はもう、これぐらいで、ねえ。後は、私がやるから」傍らで、妻の恵美子が労わるように言った。「ああ、そうだな」信明は、カウンターを見渡すと、名残り惜しそうに言った。

信明が三一才のときに、中の島通のこの場所に、丸万寿しを構えた。それから三〇年、妻と二人で、客に支えられながら、大切に築いて来た店であった。

「まさか、こんな形で、店を閉めるとは思わなかったわねえ」恵美子は、店の中に置かれた暖簾を見ながら、溜息をつくように言った。「そうだなあ。三〇年もやってきたのになあ・・・」信明は夏頃から、足の付け根のしこりが気になって、先月病院へ行ってみた。痛みは全くなかったのに、すぐに入院検査が必要だと言われた。一抹の不安を抱えながらも、大したことはないだろうと思っていた。

だが、検査の結果は、リンパ腫であった。信明は、恵美子と二人で、医者
の話聞いていた。話を聞き終わると、
恵美子は泣崩れてしまった。今まで信
明を支え、気丈に店を切り盛りしてき
た恵美子であったが

「先生、治るんですよね」と正気を失
ったように、医者に詰め寄った。信明
は、そんな恵美子の姿を初めて見た。
そして、自分の前に突きつけられた現
実の深刻さを、どう受け留めて良いの
やら、不安を感じていた。

医者は、幸い薬の効きやすい部位の
ため、時間はかかるものの、完治でき
る可能性も高いことを話した。

信明は、医者話を聞きながら、ふ
と窓の外を見た。そこには、手稲山の

稜線が姿を現していた。そして、一瞬、
生まれ育った炭鉱街の山並みを思い
浮かべた。いつも自分たちを見守って
くれた、夕張岳の姿であった。

その日から、信明は店のことばかり
考えていた。だが、いくら考えても、
店を続ける術は見出せなかった。

「やはり、店は閉めるしかないか」
信明は、消灯時間の過ぎたベッドの上
で、天井を見ながらつぶやいた。

翌日、信明と恵美子は、丸万寿しを
閉めることを決めた。

「あの医者も、全く融通がきかないな
あ。こっちは、三十年も続けてきた店
を、閉めるって言うのに、たった三日
しか、外泊許可が出ないんだからなあ、
全く」

何もかもが、急な話であった。人生の節目が、一遍に折り重なったようであった。

長年世話になった客には、落ち着いたら礼状で、挨拶をさせてもらおうと思ひ、改めて閉店については、知らせていなかった。何よりも、こんな急な形で店を閉めることが、二人とも心苦しく思っていた。

それでも、何人かの馴染みの客が、信明を心配して、店を訪ねて来てくれた。その中には、ここ十年ばかり、家族で来てくれた山本もいた。

山本のところには、小学生の男の子と女の子がいた。この十年、信明たちは、二人の子供達の成長を、自分たちの子供の幼児期と姿を重ね、見守って

きた。

子供達が来ると、恵美子はお菓子を買渡したりしていた。子供達も、おもちゃ持参で、丸万のおじさん、おばさんに会うのを楽しみにしていた。

信明も恵美子も、この三〇年客筋で苦労したことはなかった。一度子供連れの客が来てくれると、ずっとその子たちの成長を見ることができたのも、幸せなことであった。

「この店は、お客さんには、本当に恵まれていましたね。そして、大家さんにもねえ。本当に、ありがたいです
ね・・・」

「そうだなあ。特に、大家さんには、最後の最後まで、世話になりっぱなしで」

外泊許可が出ると、信明と恵美子は真直ぐに、大家を訪ねた。

「永い間お世話になって、急な話で申し訳ないんですが、店を閉めることになって・・・」

大家は驚きながらも黙って、信明と恵美子の話を聞いていた。そして聞き終わると

「丸万さん、私もちょうど今の建物も古くなってきたし、立て替えようかと思っていたところなんですよ。これから雪が降るし、春になって雪が溶ける頃までは、工事にかかれなから、それまで、荷物を置いたままで、どうぞ使ってやってください。もちろん、家賃はいりませんよ。いや、むしろ、最後まで丸万さんに使ってもらった方

が、私も嬉しいですから。だから、まずは体のことを第一に考えて、ねえ・・・」

信明は、大家の心遣いが心底ありがたかった。

「ありがとうございます」と言うのがやっとで、二人はいつまでも頭を下げていた。

「店の中は、こんなもんでとりあえず良いだろう。後は済まないが、春まで頼むな」信明は厨房道具も少なくなり、ガランとした店を見渡しながら言った。

「任せておいて。春までなら、全部きれいにかたづくわ。それに、来週は啓子も来てくれるって言うし・・・」

信明は、娘の啓子には、もうしばらく

く、知らせないようにと行ってあった。

啓子は昨年結婚したばかりで、今は五ヶ月の身重であった。恵美子は、信明の気持もわかりながらも、一人では抱えきれず、嫁ぎ先の仙台に電話をした。

「もしもし、お母さん、もしもし、どうしたの、お母さん」

啓子は、冷静さを失った恵美子の電話に戸惑いを感じた。

「啓子、お店閉めることになって、お父さんが、お父さんが大変なの・・・」

啓子は、母の話を聞くと、直に夫に相談し、札幌へ帰ることを決めた。

啓子は、ふっと思い出した。以前にも、こんな母を見たことがあった。弟の健一が、死んだときであった。あの日、啓子は友達の家に遊びに行ってい

た。あのときも、母から急を知らせる

電話がかかってきた。父のことかと思いついた。あんなに野球が好きだったのに、健一が死んでからは、客が帰ると、直にテレビのチャンネルを変え、野球を見なくなっていた。

（今度は、お父さんが・・・）啓子は、そんなことがあるはずがないと、自分の恐れを打ち消した。

「後は、外の物置見てくるわね」

恵美子は、勝手口の戸を開け外に出た。いつのまにか、雨は上がっていた。

物置には、家の中に入りきらない家庭用品も入っていた。その中には、子供達のおもちゃなどもあった。

今は、子供に新しい物を買って与える時代になったが、信明も美啓子も親の

苦勞を見ながら育ったので、どんな物でも、簡単に捨てることができなかつた。

恵美子は、古い木の箱を運び出してきた。

「その箱、俺がこさえた子供たちの……」

信明は、二五のときに恵美子と結婚し、翌年長女の啓子が生まれた。そして、二年後には長男の健一が生まれた。

当時住んでいた狭いアパートは、いつも子供たちのおもちやが散らかっていた。それを見かねた信明は、二段式の引出しがついた木のおもちや箱を作った。

「あの子達が、まだ小さい頃、あなたが作ったのよね。何か懐かしいわ……」

恵美子はそう言いながら、雑巾で箱を拭き始めた。そして、汚れを取ると、上の段の引出しを開けた。

そこには、啓子が小学生の頃、遊んでいた着せ替え人形が入っていた。

「あら、これ啓子のお気に入りの人形だわ。着せ替えの服も一緒になって」

恵美子は、人形を手に取ると、優しく髪の毛を撫でていた。

恵美子は、小樽の貧しい漁師の家に生まれた。兄弟が五人もいて、生活が大変であった。子供の頃、新しいおもちやを手にしたことは、一度もなかった。

恵美子にとって、新しい人形は、宝物のようであった。だから、娘の成長に伴い使わなくなった着せ替え人形

などは、大切にしまっておいた。

そして、店に来る子供連れの客があると、それらのおもちゃで遊ばしたり、ときには使ってもらったりしていた。「そうだ、この人形まだきれいだもの、山本さんとこの瑞穂ちゃんに使ってもらえないかしら」

恵美子は声を弾ませて言った。

「そうだなあ。山本さんところなら、喜んで使ってもらえるだろうなあ。でも、今はだめだ。かえって、山本さんに、負担かけてしまう」

信明はそう言うのと、人形から目を離した。

「そうですね。今は、まずいですよね・・・」

恵美子は、少しうつむき加減で言う

と、人形を引き出しの中に戻した。そして、次は下の引出しを開けてみた。そこにも、啓子のおもちゃばかりであった。少しだけ手にとってはまだ戻し、引き出しを締めようとしたが、何かに引っかかったようで、閉めることができなかつた。

「あら、どうしたのかしら」

何度試しても、上手く行かなかった。「もう、古いから建付けが悪いんだろう。どら、貸してみれ」

信明は、恵美子の側へ行くと、勢い

良く引出しを引いてみた。

すると、引出しは一気に抜けて、中のおもちゃが、床にこぼれ落ちた。そして、引出しの奥からは、子供用の小さなグローブが出てきた。色褪せた緑

色のグローブであった。

「あっ、このグローブ・・・」

傍らで恵美子は、悲鳴に似た声を上げた。

「そうだ。健一のグローブだ」

信明は、僅か五才で逝った息子を、抱き上げるかのように、グローブを手に取った。

「こんなときに、出て来やがって、全く健一の奴は・・・」

長女の啓子を授かった二年後に、健一が生まれた。夫婦にとっては、宝物のような子供達であった。

長女の啓子が小学校に上がると、健一も幼稚園に入った。

その頃、健一は父親の影響もあり、野球に興味を持って、グローブを欲し

がった。信明は幼児用の小さなグローブと、ゴムまりのボールを健一に買い与えた。

信明の父も野球が好きで、良くキャッチボールをして遊んでくれた。もし、炭鉱事故さえなければ、孫の健一とキャッチボールを楽しむこともできたのにと、信明は思うことがあった

丸万寿しは、毎月第二、第四月曜日が定休日であった。月曜の休みになると、健一は幼稚園へ行く前から、キャッチボールを楽しみにしていた。

そんなある日、いつものように、中の島公園でキャッチボールをしていると

「お父さん、僕、小学校のお兄ちゃん達が使っている、イボイボのついたボ

ールがいいなあ・・・」と健一はねだった。

信明は少し考えてから「そうだなあ、小学校に入って野球部に入るなら、今から慣れておいたほうが良いか」と言った。

その夜、商店街の寄合の帰り、信明は軟式ボールを買って来て、寝ている健一の枕元に置いた。

「わあ、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、イボイボボールだ」

健一は、朝早く目覚めると、はしやぎながら言った。

「健一は、店が休みの日になると、もう幼稚園行く前から、お父さん、帰ってきたらキャッチボールだよって、良く言っていたわね」

信明が手にした小さなグローブを見ながら、恵美子は言った。

「そうだなあ。でもなあ、本当は、俺の方が楽しみでなあ」

信明は、一緒にキャッチボールをしているときの、健一の嬉しそうな笑顔を思い浮かべていた。

店がある日は、啓子も健一も、小学校、幼稚園が終わると、真直ぐ店に帰ってきた。

夏も終り、秋の気配が漂い出した頃には、健一は、かなり早い玉も投げられるようになっていた。そんな九月のある日、健一は幼稚園から帰ってくる時、いつもになく信明にまわりついていた。

「ねえ、お父さん、キャッチボールし

ようよ。ねえてばあ」

信明も夕方前に暇になったら、一緒に遊んでやろうと思っていたが、その日に限って、客足は絶えなかった。健一も待ちきれずに、何度も信明にねだるのであった。

「お父さん、まだ・・・」

信明は不憫に思いながらも、つい叱ってしまった。すると、健一は店の外へ出て行った。そして、一人で店の裏の壁にボールをぶつけながら遊び始めた。

心配して、恵美子も様子を見に行っていたが、車の通りのない裏で遊んでいるのを見届けると、店に戻って来た。

それからしばらくして、店の前でけたたましい車のブレーキの音と、同時

にドーンという鈍い音が聞こえてきた。

最初に恵美子が、店の外に飛び出して行った。

「健一、お父さん、健一が・・・」
恵美子の叫び声が、通りに響いた。

信明もあわてて駆けつけると、健一は頭から沢山の血を流し、道路の端に倒れていた。

健一の手には、ボールが握り締められていた。健一はボールを追いかけ、通りに飛び出し、車に撥ねられてしまった。

血だらけの健一を見て、友達の家から駆けつけて来た啓子は

「お母さん、信ちゃん死んじゃったの。お父さん、信ちゃん、死んじゃったの」

と言うなり泣きじゃくり出した。

「そんな訳ないだろう、健一が、健一がこんなことで、こんなことで・・・」
信明は、自分に言い聞かすように、大きな声で言った。

健一は、ほぼ即死状態であった。たった五年間の短い一生であった。

信明は、健一の死を心から悔やんだ。

あのとき、一緒に遊んでやれなかった自分自身を責め続けた。そして「あいつは、本当に良い息子だった。俺にもつたいたいぐらい良い息子だった」と、仏壇の前で呟く日々が続いていた。

そんな信明が、健一の死を受け入れるまでは、長い時間がかかった。そして、やっと受け入れた頃、健一のことを身近に感じることも、多くなっていた。

た。

「もし、あの子が生きていたら、この店閉めなくても良かったかもしれなかったら、お父さんみたく、寿司屋さんになりたいって・・・」

恵美子は、こぼれ落ちたおもちゃを拾いながら言った。

「そんなこと言うもんじゃない。健一が聞いていたら、悲しむじゃないか」
信明は、恵美子を嗜めながら、自分にも同じ思いがあることに気づき、後ろめたさを感じていた。

信明の人生には、不幸な出来事が、多かった。中学一年のときに、落盤事故で父を亡くしてしまった。それから、下の三人の弟、妹たちの面倒を見なが

ら、母親を支えてきた。

中学を卒業すると、薄野の大きな寿司屋に住み込みで働いた。寿司屋を選んだのは、口にするのもできなかつた寿司を、母親や弟達に、腹一杯食べさせてやりたいと思ったからだつた。

そして、生前父が酒を飲んだとき「今度、銭入つたら、皆で鉄ちゃん寿司に行ってみたいなあ」と言つた言葉が、信明の心に強く残つていた。

一緒に、三人の見習いが入つたが、一年後には、信明を除き皆辞めてしまつた。職人の世界は、想像以上に厳しいものであつた。

それから、二年が経つた頃、親方が信明に言つた。

「良く辛抱して、三年もつたなあ。お

まえは、一度も辞めよとは思わなかつたのか」

「はい、あの、いいえ」と信明がはつきりと言わないと

「何も、ここまでもつたんだから、正直に言ってみろ」

親方は少し酒臭い息をしながら、優しく言つた。

「俺、ここ辞めると、母さんに心配かけるから。俺とこ、父さんいないし、下にまだ三人もいるし。それに・・・」
信明はそこで言葉を、飲みこんでしまつた。

「それに、何だ。今日は全部喋つてみれ」

親方は信明の言葉を待っていた。

「それに、俺とこ貧乏だつたから、母

さん達に腹一杯寿司食べさせてやるの夢なんだ・・・だから、早く一人前になって、母さんにも楽させてやりたいたいと思って・・・」

信明は下を見ながら、少しはにかんで親方に言った。

親方は、信明の坊主頭を撫ぜると

「そしたら、明日から、俺がみっちり仕込んでやるからなあ」と言ってくれた。

それから、更に七年の修業を経て、信明は二五才のときには、カウンターに立つことができた。そして、三一才には、独立して店を持つことができた。今の丸万寿しは、親方が世話をしてくれた店であった。信明の人生でも、最も輝いている時期であった。

それから、僅か二年後に、長男の健一を亡くしてしまった。早くに父を亡くし、かけがえのない息子も、幼くして失ってしまった。そして、今度は自分の病気により、店までも閉めることになってしまった。

「恵美子・・・」

「うん、何・・・」

恵美子は、振り向きながら言った。

「俺は、十三のときに親父を亡くし、三十三のときには、健一も亡くしてしまった。あのときは、こんなことってあるものかとも思っていた。でもな、今は、俺は幸せ者だと思っている。こうして親方の世話で店持てて、お客さんにも恵まれて。だから、俺はちっとも、自分のことを不幸だと思っていない

い。俺は、本当に幸せ者だ。だから、おまえにも、心からお礼を言いたくて。本当に、今までありがとうなあ。俺は、おまえに、とても感謝している。なのに、こんな形で店閉めることになって、本当に、済まない・・・」

信明はそう言うと、妻に深々と頭を下げた。

その夜、家に帰ると、信明は妻が作った夜食を肴に、久し振りに酒を飲んだ。酒を飲みながら、三〇年分の疲れが、一気に被さってくるのを感じた。そして遠ざかる意識の中に、前岳に被さった夕張岳の姿と、長屋がびっしりと張り付いた故郷の街並みが、薄っすらと浮かんできた。

（ああ、帰りたいな・・・あの頃に）

そう呟くと、信明は深い眠りへと落ちて行った。

「お父さん、お父さん、起きてよ」

懐かしい声がして目を開けると、傍らに健一が立っていた。信明は店の小上がりに寝ていた。店の中を見渡すと、厨房には沢山の器が並べられ、カウンターの冷蔵庫にも、色艶の良い寿司ネタが所狭しと置かれていた。

「健一、おまえどうしてここに・・・」

信明は驚きながらも、嬉しさが込み上げてきた。

「だって、お父さん、お客さんが帰ったら、一緒にキャッチボールしてくれらるって、約束したしよ」

良く見ると、健一の左手には、あの緑色のグローブがあった。そして、左

手には信明のグローブを持っていた。

「ああ、そうだったなあ」

信明は起きあがると、健一からグローブを受け取った。

「ええと、ボールは」と信明が言うと

「お父さんと一緒に遊べるようになって、お姉ちゃんが、秘密の場所に置いてくれたんだよ。僕、その場所知ってるよ」

健一はそう言うと、店の看板の前に立った。

「お父さん、暗いから看板に電気つけて」

「あ、待ってな」

信明は、カウンターの横にあるスイッチを入れた。すると看板に明かりがつき、丸万寿しの文字が、闇の中にく

つきりと浮かび上がった。通りは街路灯が灯っていたが、車も人通りもなかった。

健一は、看板の下にある小さな穴に手を入れると、ハンカチに包まれたボールを探し出した。

「ほらね、ちゃんとあったでしょう」

健一は嬉しそうに言うと、信明と手をつないだ。小さな手の感触が懐かしかった。二人は、いつも遊んでいた中の島公園へと、歩き出した。

信明は、健一の手を握りながら、体中に幸せが満ちてくるのを感じていた。信明は、啓子からも、健一からも、そして、妻からも沢山の幸せを貰って、今まで生きてきた。この家族にめぐり合えて、本当に良かったと思った。そ

う思うと信明は、たまらなくなつて、健一の手をぎゅっと握り締めた。すると、健一も握り返してきた。

「お父さん、やっつと、キャッチボールができるね」

健一は、嬉しそうに、あのイボイボボールを握っていた。

「これから、お店の休み月曜でなく、日曜にしようか」

「えっ、本当。だったら幼稚園も休みだから、お父さんと一杯キャッチボールできるよね」

健一は嬉しそうに言った。

信明は、健一の嬉しそうな顔を見ているうちに、切なくなってきた。あのとき、一緒に遊んでやれば、健一だつてあんなことに……。信明は、心の

中で、何度も健一に詫びていた。

公園に着くと、街路灯の下に恵美子が立っていた。

「お前も来たのか……。」信明が言う

「お母さんだけ、仲間外れじゃ可愛そうだから、僕がお願いして来てもらったんだよ」

健一は、恵美子の手を取りながら言った。恵美子も嬉しそうに、健一を見ていた。

「あれ、健一、そのイボイボボールどうしたの」

恵美子はそのボールのことを、良く覚えていた。

「秘密の場所で見つけたんだよ、ねえ、お父さん」

健一は、少し悪戯っぽい笑顔を浮かべ言った。

恵美子が見守る中、誰もいない夜の公園で、二人はキャッチボールを始めた。

信明も恵美子も、健一の一つ一つの動きを、目を細めて見ていた。それは、とても幸せな陽炎のようなときであった。この切なくて、満たされた瞬間が、いつまでも続けばと、思わずにはいられなかった。

しばらくすると、信明は疲れを感じた。どうしようもなく体が重く、立っているのもやっとであった。信明が、しゃがみ込んでしまうと、健一と恵美子が駆け寄ってきた。「お父さん、病気なんだって」

健一は心配そうに、信明の顔を覗きこみながら言った。

「いや、たいしたことないから」

信明は、健一に心配かけまいと、微笑みながら言った。健一は、そんな信明の顔を、悲しそうに見ながら言った。

「お父さん、幾つになったの」

「お父さんか、今年の九月で、六一になった」

それは信明自身も驚くほど、疲れた声であった。

健一は、少し戸惑いながら言った。

「お父さん、僕、五才のままなんだ。あのときから、ずっと、五才のままなんだ」

それは、とても悲しそうな声であった。「お父さん、丸万寿し止めちゃうの」

「うん、病氣治るまで、少し時間かかるって、先生に言われたから・・・」

信明は、努めて元氣そうに言った。

「僕のせいだね。僕がちゃんと大きくなっていたら、お父さんの店継いでいたのに。あんなことになって、僕はいつまでも、五才のままだから・・・」

健一はそう言うと、ポツリと握り締めたボールの上に涙をこぼした。

「健一のせいじゃないよ。かえって、お父さんこそ、あるとき、一緒に遊んでやれなくて、本当に済まないと思っている」

「そんなことないよ。お父さん仕事忙しいのに、いつも時間作って、一緒に遊んでくれたしょ。それに、僕、ちっとも寂しくないよ。いつだって、お母

さんやお姉ちゃんも、僕のこと忘れな
いで、思っていてくれるし。ただ、お
店がなくなるのは、悲しいな・・・」

信明は、思わず健一を抱き寄せた。

「おまえ、そんなにお父さんが、店閉
めてしまうのが、悲しいのか」

「うん、だって、丸万寿しは、家族の
一員だもの。あそこで、僕も、お姉ち
ゃんも、楽しいこと一杯あったし。そ
れに、僕お父さんのお寿司、好きだ
ったし。だから、お父さん・・・」

健一は、信明の腕の中で、甘えるよう
に言った。

「健一、ありがとうな。お父さん、お
まえにそう言ってもらえて、本当に嬉
しいよ。ありがとうな・・・」

信明は、声を詰らせて言った。傍らで

は、恵美子も泣いていた。長い間、三人はそうしていた。

やがて、健一は、砂が指の間から、こぼれ落ちるように、信明の腕から静かにすり抜け、信明と恵美子の間に立った。

「お父さんの病気、必ず治るよ。だから、丸万止めちゃいやだよ。あの店があれば、またお父さんと一緒に、キャッチボールもできるし……」
健一の輪郭は、徐々に消えかかってきた。

「健一、行くな、健一……」

信明は思わず手を伸ばして叫んだ。でも、その半透明な体は、もう信明の腕では、抱きしめることはできなかつた。

「お父さん、今日は、キャッチボールしてくれてありがとう。お母さんも、一緒に公園に来てくれてありがとう」
健一は、笑顔で手を振った。やがて、健一の姿は完全に消えてしまった。

「健一、健一……」

信明は、健一を呼ぶ自分の大きな声で、目が覚めた。そして、恵美子も、布団から起き上がった。二人は同時に「健一が……」と声を出した。二人は、同じ夢を見ていたのであった。

「よし、店へ行こう」

二人は、素早く着替えると車に乗り、丸万寿しへと向かった。

夜の闇も開け、薄っすらと空が明るくなっていた。店に着くなり、信明は、看板の下から手を入れた。そして、ハ

ンカチに包まれたボールを取り出した。

「あっ、やっぱりあった。健一のイボイボボールだ」

信明は、ハンカチを取ると、しっかりとボールを握り締めた。

「このボール、啓子が、あるとき、ここに置いたのね」

恵美子は覚えていた。

葬儀が終わった後、健一の荷物を整理しているとき、ボールが出てきた。

信明は、見てるだけでも辛いので

「そんなの捨ててしまえ」と言ったが、小学校一年の啓子は、頑として聞き入れなかった。

「捨てちゃダメ。これ、信ちゃんの大
事なものだから」と言っていて、どこかへ

持ち去ったのであった。

あれから、二十八年の歳月が流れた。

信明は、ボールを握り締めながら言
った。

「恵美子、朝になったら、大家さんの
所へ行こう。そして、頼むんだ。もう
一度、この場所を、丸万寿しに貸して
もらえるように」

「そうですね。丸万寿しは、私たちの、
健一の、大切な家族なんだから。それ
に、健一も、また、キャッチボールが
したいだろうから・・・」

恵美子も頷くように言った。
やがて、朝日が昇り、丸万寿しの看
板を照らし出した。信明と恵美子は、

光の中に浮かび上がった、丸万寿しの
文字をしっかりと見ていた。

そして、信明は光の中に、前岳に被
さった夕張岳を見たような気がした。
（こんなことで、負けてたまるか。こ
んなことで・・・）
信明は、故郷の山並みに向かって、そ
う心の中で呟いた。